

また映画館で

会いましょう

See you
at the
cinema

編集部=文
text by KOTONONE
醍醐実加=イラストレーション
Illustration by Mika Doga

チュプキで観る映画は、
ひと味違う

二〇一六年に開館した日本唯一のユニバーサルシアター、シネマ・チュプキ・タバタ。チュプキはアイヌ語で、光を意味する。森をイメージした劇場にあるのは、パリ・オペラ座にも採用されているキネット社のシートに、森の中で豊かな音の粒が降ってくるようなイメージを具現化した音響設備。大のコーヒー好きの代表・平塚千穂子さんおすすめのコーヒーも、注文できる。一つひとつのものの選び方に、思いが感じられる。席数たった二〇席の小さな映画館だ。

ここをつくったのは、視覚障害者も映画を楽しめるよう、音声ガイドの環境づくりを行うボランティア団体シテイ・ライツ。上映会を続けていく中で、念願だった常設の映画館の開館にこぎつけた。すべての上映作品には、音声ガイドと日本語字幕がついている。映画館は普通、お客さんの入りを見て、上映作品を週単位で変

えていくが、チュプキでは上映作品は月ごとに固定。「障害をお持ちの方は、外出時にルーパーさんをお願いするので、あらかじめ時間が決まっていなと、頼みにくいので」と平塚さん。みんなが楽しめる映画館は、ただバリアフリー環境を整えればいわけではないのだ。

社会の問題を 浮き立たせてくれる存在

作品は、話題作から、障害のある人のドキュメンタリー、昔のクラシック映画まで、さまざま。「人権だとか、障害者のことを知ってもらいたい」というのもあるけど、エンタメとして映画を楽しみたいという当事者の希望もありますから、バランスですね。でも、障害のある人をテーマにした作品は、ここ最近本当に増えたなと思います」。たとえば二月にチュプキで上映した『37セカンズ』は、脳性麻痺の女の子が主人公の映画。当事者である佳山明^{あき}さんが演じた。「障害のある方の人生は、普通の人より、ドラマチックですすね。でも特別な人の話というよりは、重なる部分を見てもらい

たいなと思います。障害者は、その生きづらさを通じて、社会の問題を浮き立たせてくれる存在でもあると思うんですよ。社会のことをいっしょに考えるためのツールとして、紹介しているつもりです」。常連のお客さんの中には、視覚障害の男性と聴覚障害の女性のカップルがいるという。コミニケーション手段が違う二人が、同じものを、同じ瞬間に楽しめることは、どれだけうれしいことだろう。

チュプキがともす 新しい灯

目の見えない人のために制作されてきた音声ガイドだが、最近では、新しい映画の楽しみ方を提供するツールにもなっている。「アニメなんかは、音声ガイドを声優さんをお願いしてつくることが多い。うちだけなので、通ってくださいるファンの方もいて。劇場にいる方全員が、イヤホンで聞いているときもあります」。古い洋画で吹き替え版がない場合は、音声ガイドに、吹き替えと場面説明のナレーション、どちらも吹き込むが、これが、字幕を

目でおう必要がなく、もとの役者の声も楽しめると、健常者にも好評なのだという。

今後上映予定の齋藤陽道さん（写真家、ろう者）のドキュメンタリー『うたのはじまり』では、絵字幕という新しい試みが使われている。日本語字幕に加え、ろうの人にも、もって「歌を見える」ようにしたいと、音楽を聞いて、アーティストが五線譜の上に描いた絵が、字幕のように入っている。「音声ガイドも字幕も、障害者のためのものじゃなくて、鑑賞を二度三度楽しむためのツール、作品をより深く知る、おもしろくするツールになっていったらと思っています」。誰もが楽しめる映画館は、新しい映画体験ができる場所だった。

※新型コロナウイルス感染拡大の影響で、シネマチュプキは五月一日まで休館、その後の予定は原稿作成時は未定となっています。上映情報などは、直接劇場にお問い合わせください（二〇五ページ参照）。チュプキを応援したいと思った方は、「チュプキ・サポーター・クラブ」にご参加ください。詳しくはホームページをご覧ください。



ロビーの天井部分。
葉っぱには、開館のときに行ったクラウドファンディングの支援者の名前が書かれている



東京・田端駅をおりて、徒歩5分。
商店街の中にチュプキはある

社会をたのしくする障害者メディア

KOIONONE

KOIONONE VOL.34

Featured Story

特集
福祉を、しゃべろう

